

【調査報告】長崎県西彼杵半島における北端域の石鍋製作遺跡

—柴山・岩氏・喜十谷石鍋製作遺跡—

松 尾 秀 昭

2024年5月

『西海考古』第14号 抜刷

【調査報告】長崎県西彼杵半島における北端域の石鍋製作遺跡

—柴山・岩氏・喜十谷石鍋製作遺跡—

松尾 秀昭

1. はじめに

平安時代末期に製作され始めた滑石製石鍋（以下、石鍋とする）は、12～13世紀を中心に全国へ爆発的に供給され、15世紀にかけて衰退する。このことは、発掘調査報告書を網羅的に確認することにより分布域を捉えることができるとともに、時代的な分布域の遷移と遺跡の性格をも把握することが可能となってきている。近年では、新里氏による全国的な出土遺跡の整理（新里2002）が行われているほか、各研究者により行政単位や地域単位での出土傾向の集成までも行われている。

このように全国各地の石鍋出土遺跡及び使用状況の整理がこの20年で飛躍的に行われている一方、石鍋の一大生産地である長崎県西彼杵半島では、大正期に石鍋製作遺跡の分布調査を開始して以降、ホゲット石鍋製作遺跡（国史跡）の発掘調査並びに半島内の製作所跡の踏査報告（下川1980）、茅場崎石鍋製作所跡の調査（西彼町1998）以外、地元郷土史家や長崎石鍋記録会らの踏査報告によるところが大きい状況である。

その西彼杵半島には、現在までに石鍋製作遺跡は72箇所が確認（長崎県1994）されており、上記した郷土史家と長崎石鍋記録会の成果を踏まえると、その箇所数は倍以上に膨らむことは確実であり、大なり小なり合わせると無限にあるのではないかと錯覚してしまうほどである。しかしながら、近年の気候変動・人的被害の影響もあり、数百年間にわたり当時の形態を留めてきた石鍋製作遺跡は変容しつつあり、これまで自然に維持してきた形状の過渡（限界）期に差し掛かっているといえる。国史跡であるホゲット石鍋製作遺跡第6工房跡の壁面が一部崩落したことも、経年劣化と急激な気候変動の両要因が影響していると想像でき、その他の数百の石鍋製作遺跡もいずれ同じ道を辿ることは避けられない。このような気候変動・人的被害等による形状変容を受け入れざるを得ない石鍋製作遺跡の記録保存を目的として、西彼杵半島の最北端域で新規発見した3遺跡の調査報告を行うものである。

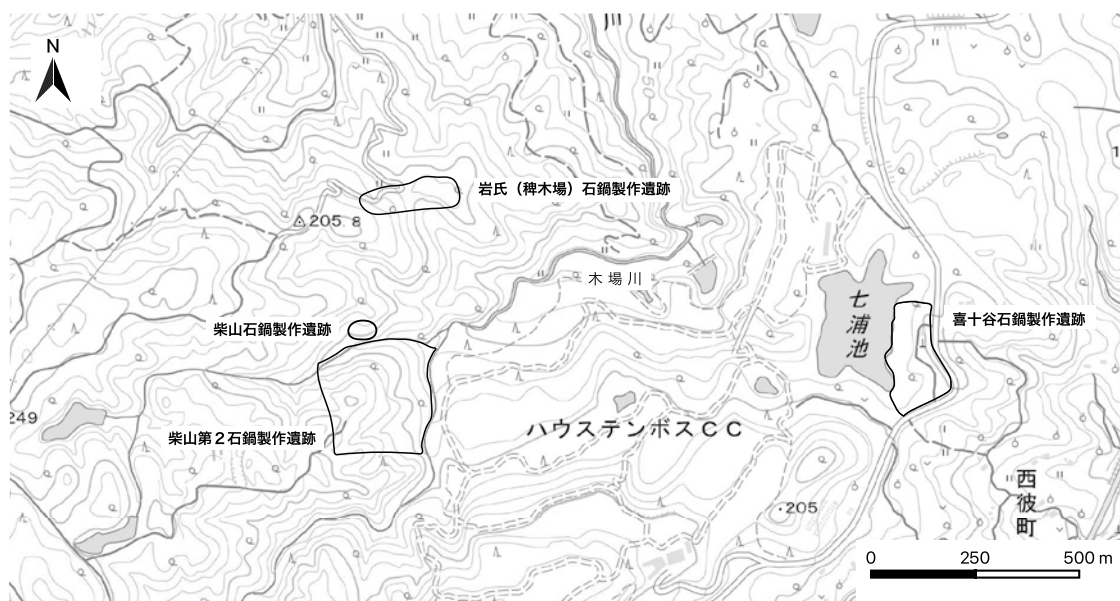


Fig.1 報告遺跡位置 (S=1/20,000)

2. 各石鍋製作遺跡の現況

(1) 柴山^{しばやま}石鍋製作遺跡

西海市西海町木場郷と同太田原郷の広範囲に跨る石鍋製作遺跡であり、現在までのところ、西彼杵半島最大の製作遺跡と考えられる。本製作遺跡は長崎県教育委員会による分布調査が1982年（昭和57）に実施され、本報告の柴山017～019工房跡の周辺を踏査（註1）しているが、製作遺跡の主体をなす柴山001～015の工房跡の発見には至っていない。当時の分布調査記録を確認したところ、石鍋未製品の「散布地」として遺跡に登録されているようである。

筆者は当該地域一帯を2012年（平成24）から踏査を開始し、長崎県教育委員会の分布調査地点で3箇所³の工房跡を確認するとともに、その南方に大規模な工房跡群を発見した。しかし、2020年（令和2）12月に林業関連工事により工房跡が毀損していることを確認し、西海市教育委員会と現地協議を行なった。その後⁴に新規発見のこれら工房跡群は、「柴山第2石鍋製作遺跡」として長崎県遺跡地図へ登録された。本報告で示す柴山石鍋製作遺跡は、「柴山石鍋製作遺跡」（註2）と「柴山第2石鍋製作遺跡」を包括して報告するものであり、その意図については後章で報告することとする。

柴山石鍋製作遺跡はハウステンボスカントリークラブ北西の山間部にあり、半島北側へ北流する木場川（2級河川）水系沿いに位置する。確認した工房跡の立地状況から大きく2グループに分けることができ、南方にあたる第1グループ（柴山001～016・020）は北東に傾斜する急斜面地で確認し、「柴山第2石鍋製作遺跡」に該当する。北方の第2グループは上記した1982年（昭和57）に長崎県教育委員会が分布調査を行なった地点で、南西に面する急傾斜面に3箇所の小規模工房跡が確認できる。各工房跡の規模、座標等の詳細については別表（Table.1）を参照いただき、各工房跡における特記事項のみ報告する。

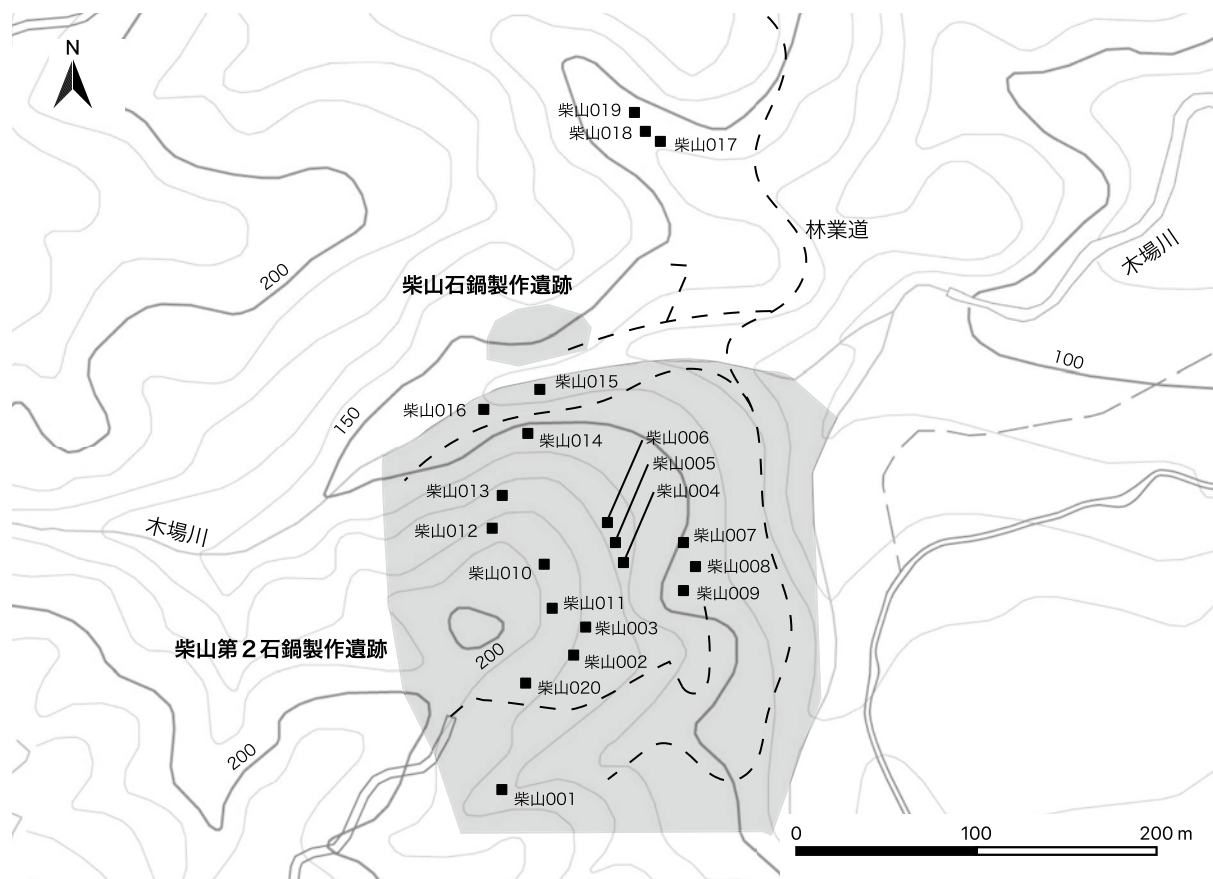


Fig.2 柴山石鍋製作遺跡 各工房跡位置 (S=1:5,000)

柴山 001 は滑石が露頭する岩壁面（註3）上位に石鍋を産出するための方形割付、下位に円形割付がみられる。柴山 002・003 は工房であった可能性が非常に高く、岩壁面の崩落または後世の削平により工房としての形状のみを留めており、僅かに残る滑石層の質は粗悪である。両工房跡の間では縦耳型石鍋を確認した。柴山 004 は岩壁面に僅かに工具痕が観察できるが、不明瞭である。近代碎石業等による改変の可能性があるが、古代・中世段階の工房面がどこまで残存しているか判断はつかない。周辺に散在する廃石（ズリ）は、人頭～50^{センチ}の大形のもの为主体をなしているものの、一部で電動削痕が見られ碎石業者による廃石も混在する。柴山 005 は 004 と 006 の中間に位置し、この3工房跡は一連の岩壁面を工房とした可能性が考えられる。一部で方形割付が認められるが、その他を含め工具痕は不明瞭である。柴山 006 の坑道入口前は通路状（約8^{メートル}）を呈し、旧地形を掘り込んだ状態となっている。これも昭和期の碎石業者によるものと考えられるが、通路両脇の廃石は石鍋製作稼働時の廃石を含む可能性もあり、その周辺から縦耳型及び鑿付型石鍋を採集している。坑道は入口すぐに二手に分かれており、その先は不明である。柴山 007 も 006 と同様に岩壁前面に通路を持ち、坑口には近代碎石に伴うエアコンプレッサが放置されている。柴山 008 は坑道のように見えるが、クレパス間に上部の壁石が滑落したものであり、下部では水が溜まって侵入は不可能である。上部壁面は滑石層と後背の蛇紋岩層の層理で崩落しており、現状の岩壁面は蛇紋岩が露頭している。柴山 009 の岩壁面の滑石層はすでに失われており、後背の結晶片岩が露頭する。急傾斜地に立地するために廃石はほとんど見られず、下位の谷底にある廃石が当該工房に伴いものである。柴山 010 は本製作所跡にあって最大規模の工房跡である。また、これほど大規模な工房跡は西彼杵半島内でも認

Table.1 柴山石鍋製作遺跡 基礎データ

工房名	位置			工房壁面状況			工具痕幅	廃石状況	未製品
	緯度	経度	標高(m)	採掘面	主軸	規模(m)			
柴山001	33.028043	129.717883	165	露頭	北向	長5.6/高2.7	2~3寸	少	なし
柴山002	33.287450	129.718355	173	クレパス	東向	長3.5/長10	2寸	なし	有
柴山003	33.028884	129.718409	172	クレパス	東向	長10/高6	—	なし	なし
柴山004	33.029235	129.718645	154	坑道	東口	幅1.2/高3.3 α	—	なし	なし
柴山005	33.029316	129.718602	154	露頭	東向	長4/高1.8	1~2寸	なし	なし
柴山006	33.029379	129.718559	158	坑道	東口	幅2.5/高1.8	—	有	有
柴山007	33.029262	129.718972	142	坑道	東口	幅1.8/高1.9	—	なし	なし
柴山008	33.029136	129.719064	141	クレパス	東向	奥行13 α /高4 α	—	なし	なし
柴山009	33.029028	129.718977	142	露頭	東向	幅1.6/高2	—	少	なし
柴山010	33.029235	129.718156	177	クレパス	北・東・南向	長67 α /高25 α	2~3寸	多	なし
柴山011	33.023974	129.718221	179	クレパス	東向	幅4/長10	—	なし	なし
柴山012	33.029393	129.717899	179	露頭	北向	幅3/高3	—	少	なし
柴山013	33.029563	129.717969	170	露頭・坑道	西向	長7/高4.4	1~2寸	多	有
柴山014	33.029856	129.718076	148	露頭	西向	長40/高5	1~2寸	少	なし
柴山015	33.030063	129.718130	134	露頭	西向	長3.3/高3.2	—	少	有
柴山016	33.029961	129.717915	144	露頭	東向	長3/高3	—	少	なし
柴山017	33.031278	129.718897	150	露頭	南東向	長4/高2.5	3寸	多	なし
柴山018	33.031303	129.031303	150	露頭	南東向	高6	—	多	なし
柴山019	33.031369	129.718808	152	露頭	南東向	長3.5/高1	—	少	なし
柴山020	33.028566	129.718067	173	露頭	東向	長2/高1.5	2寸	—	有

められず、自ずと日本最大級の工房跡である可能性が高い。工房跡は一辺 14_尺・24_尺・29_尺のコの字状を呈しており、岩壁面は内径しながら高さ 25_尺を測る。岩壁面には無数の工具痕がみられ、長期間に及ぶ稼働期間が想定できるものの、周辺地での採集資料がないため詳細は不明である。あまりにも規模が大きく、写真ではそのスケール感を表現することは困難であり、三次元計測等による手法を今後検討する必要がある。柴山 011 は斜面地に沿った細長い窪地が認められ、隣接工房跡との

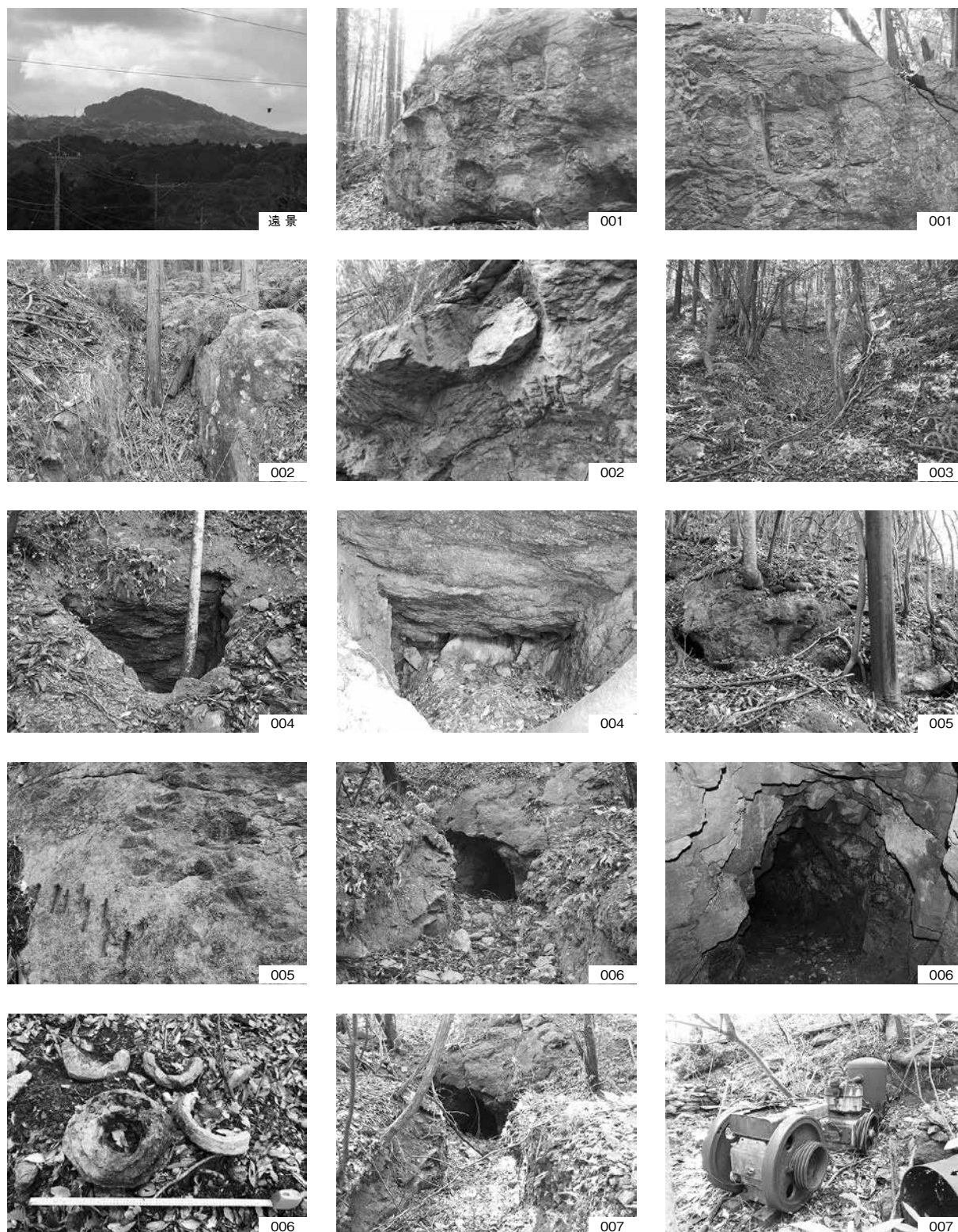


Fig.3 柴山石鍋製作遺跡 現況写真①

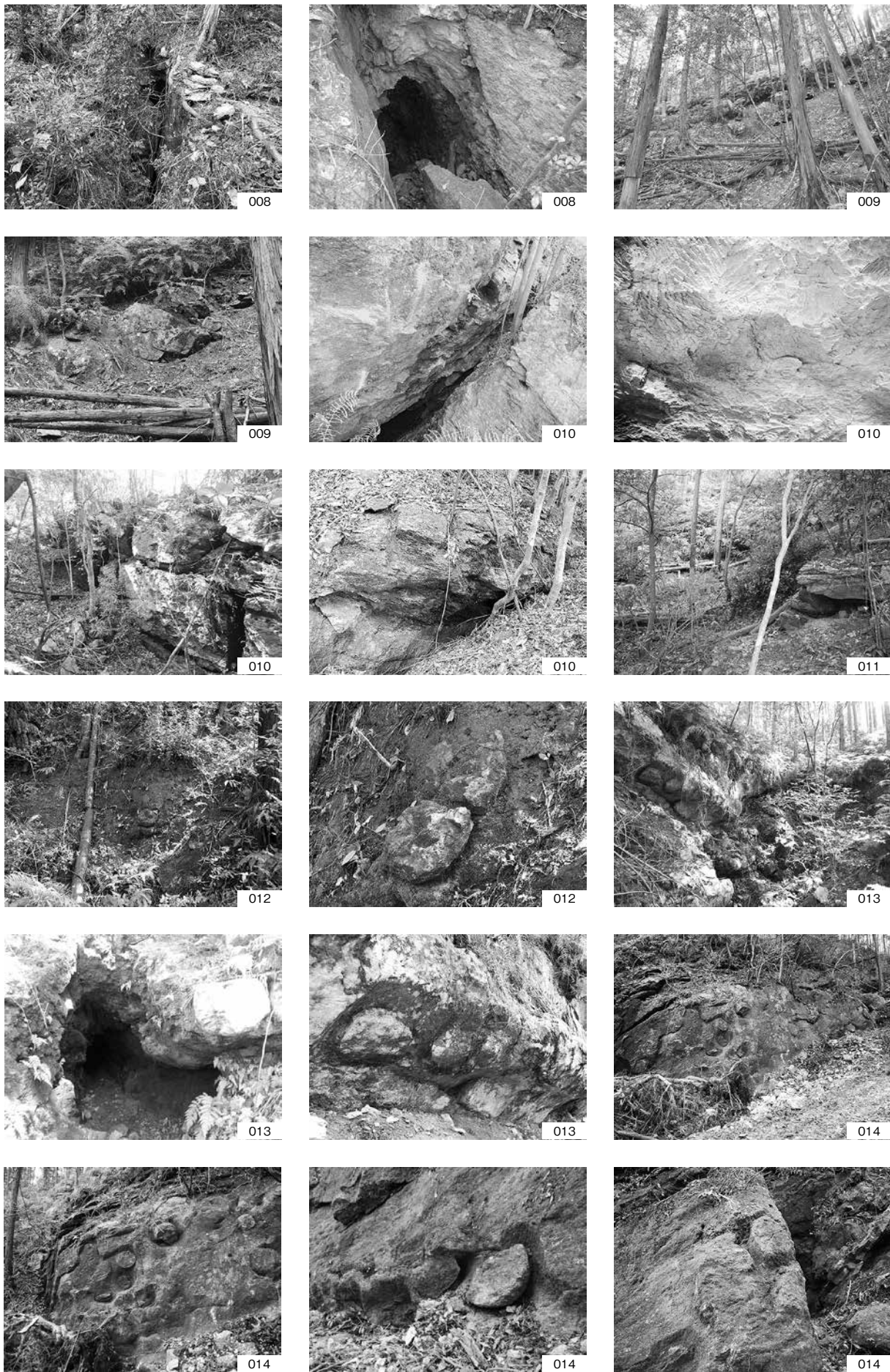


Fig.4 柴山石鍋製作遺跡 現況写真②



Fig.5 柴山石鍋製作遺跡 現況写真③

連続性から、本来は工房であったと判断した。柴山 012 の岩壁面の前面には円形の窪地が認められ、この形状は他の工房跡でもよく観察できるものであり、岩壁面前面の空間は石鍋製作稼働時の作業空間であったと推測している。なお、その背面には廃石を土塁状に排出し、作業空間（平坦面）を確保していることも確認できる。岩壁面には一辺 30 cm の方形割付がみられ、剥ぎ取り前に破損した未製品がそのまま残っている。柴山 013 は急傾斜面地に沿って岩壁面が残存し、一部で坑道と思われる坑口が確認できる。この坑口の幅は 1.0 m 、高さは 1.8 m を測り、奥行は 5 m 以上ある。岩壁面は石鍋採掘のために滑石を求めた結果、現在では大きくオーバーハングした状態で残存する箇所もある。岩壁面に残る瘤状未製品の割付は直径 50 cm と規模も大きい範疇であるため、石鍋の中でも古相を示すものである可能性が高く、そのことを補強するように本工房跡では縦耳型、鐳付型の両型式石鍋が採集できる。なお、廃石は人頭大のものが多く確認でき、近代碎石業による採掘も可能性としてはあるが、露頭壁面では近現代工具の痕跡は認められない。柴山 014 は柴山 013 の下方延長上にあり、同

一岩体であると思われる。現在確認できる岩壁面は屈曲しながら総延長40mを測り、規模が大きい工房跡である。本工房跡では採集資料はないものの、岩壁面に残る円形の割付規模と立地状況から柴山013と同様に古相を示す工房跡と想定する。なお、本工房跡は上述の2020年12月に確認した林業関係道路（以下、林業道とする。）の新設工事で毀損した工房跡である。**柴山015**は沢沿いにある岩塊の側面に剥取痕が確認でき、縦耳型石鍋も採集できる。岩壁面の風化により工具痕は不明瞭であるが、瘤状未製品が残る。**柴山016**も沢沿いに位置し、岩塊の上部に方形割付による石鍋剥取痕が確認でき、その他の痕跡は一切認められない。**柴山020**は踏査終盤に新たに確認したために、隣接する工房跡と番号は連続しない。本工房跡は林業道により大部分が削平されており、滅失した露頭部分は直径10mの範囲と想定できる。このエリアのやや東側には本工房跡から転落したと思われる鑊付型石鍋を確認した。なお、この林業道路は2011～2012年の期間に大規模に新設されたもので、第1グループ内外で縦横に敷設（Fig002）されている。柴山002も少なからず影響を受けており、その他の未発見の工房跡も毀損及び滅失していることは確実である。

柴山017～019は第2グループに属する。いずれも急傾斜地に立地し、下位の谷底は近現代に平地造成され畑地として利用されていたようである。当該斜面地では各工房跡付近に平坦部は一切見られず、工房跡から排出された廃石が谷底に厚く堆積しており、その二次堆積層は流水で露出し、滑石塊が散見される。**柴山017**の岩壁面はすでに後背の蛇紋岩が露出しているが、石鍋剥取痕（直径50cm）とともに工具痕が確認できる。岩壁面自体は内傾し、隣接して坑口らしい痕跡も見られるものの、埋没のために形状・規模は不明である。**柴山018**も同様に岩壁面が内傾し、瘤状未製品はなく工具痕のみ多く確認できる。岩壁面前面には約3mの平坦部があり、自然地形とは考えにくく、石鍋製作時の作業平坦面の痕跡と想定できる。**柴山019**は巨大な岩塊を工房として採用し、その両端は後世の猪垣と接続する。岩壁面はすでに蛇紋岩が露出し、滑石層はなく工具痕も見られないが、石鍋剥取痕は3箇所を確認できる。いずれも直径40cmの円形割付によるものである。

（2）岩氏（稗木場）石鍋製作遺跡

岩氏石鍋製作遺跡は、柴山石鍋第2石鍋製作遺跡と同時に遺跡登録された遺跡であり、この遺跡については、地元の石鍋研究者である月川繁雄氏がすでに「稗木場石鍋製作遺跡」として遺跡分布図に写真とともに報告（月川2001）しており、筆者も長く「稗木場」の名称を採用し記録していた。西海市教育委員会へも「稗木場」として遺跡発見にかかる諸手続きを行ったが、当該地の旧字名から「岩氏」とした旨、後日報告があったものである。

岩氏001は月川氏の報告に写真が掲載されており、東へ延びる尾根の頂部に位置する。露頭する岩壁面には直径50cmの石鍋剥取痕が残り、その他に明瞭な工具痕は認められない。この工房跡の周辺では、直径50cmの大型の鑊付型石鍋を確認した。なお、本工房跡の前面にも林業道があり、この道路により少なからず工房跡は毀損したことが、周辺に散乱する滑石塊から推察できる。**岩氏002**は東方向に延びる尾根の北斜面にあり、市道横で確認した。市道開削により露頭岩壁面のみが残存し、その岩壁面には石鍋剥取痕が認められる。**岩氏003**は同尾根の緩斜面地に立地する。岩壁面に明瞭な石鍋剥取痕は観察できず、工具痕のみ確認できる。これら3工房跡の周辺には、市道及び林業道が極めて近くに通っており、道路断面や周辺に工具痕が残る滑石岩塊が散乱している。これら地表面に散乱する滑石片の量から推測すると、本来はさらに工房跡が存在した可能性が高い。

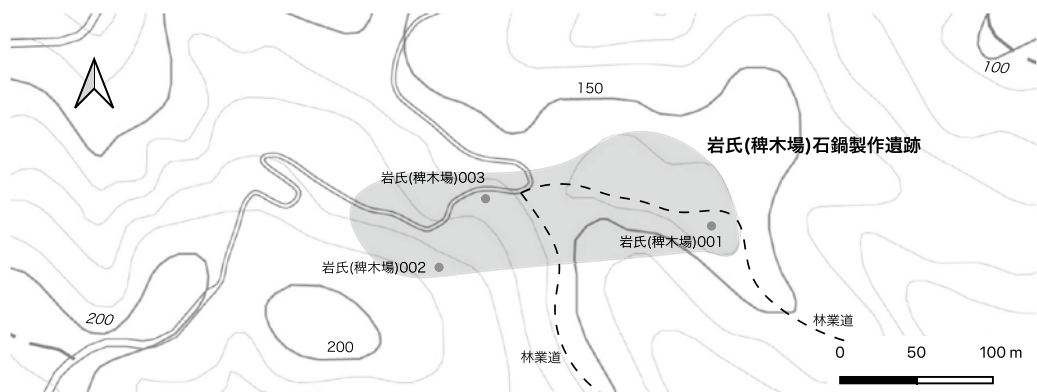


Fig.6 岩氏（稗木場）石鍋製作遺跡 各工房跡位置 (S=1:5,000)

Table.2 岩氏（稗木場）石鍋製作遺跡 基礎データ

工房名	位置			工房壁面状況			工具痕幅	廃石状況	未製品
	緯度	経度	標高(m)	採掘面	主軸	規模(m)			
岩氏001	33.033198	129.720339	161	露頭	北向	長3/高1	—	不明	有
岩氏002	33.033358	129.718756	158	露頭	北向	長3/高1.5	—	不明	なし
岩氏003	33.032955	129.718430	173	露頭	東向	長8/高1.2	1~2寸	少	有

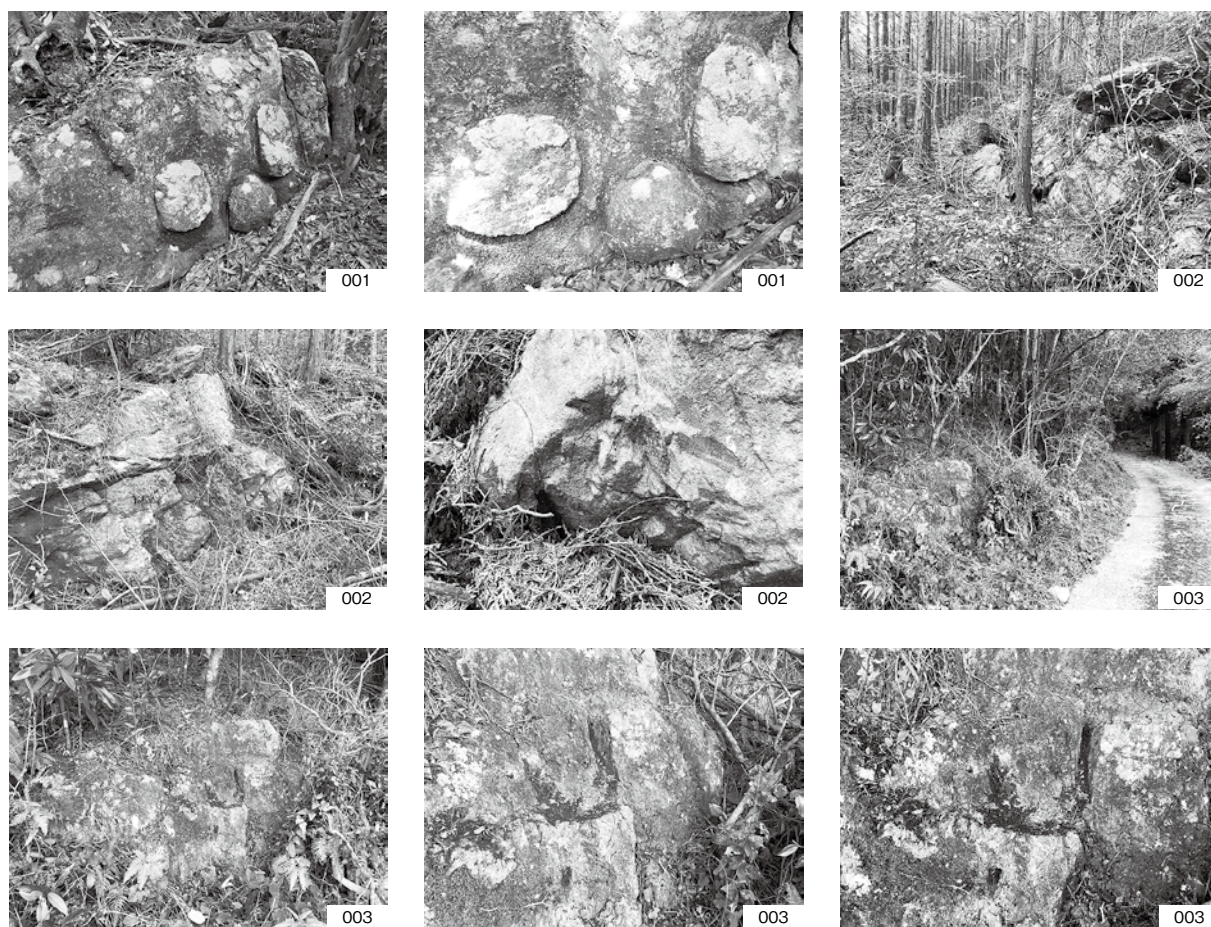


Fig.7 岩氏（稗木場）石鍋製作遺跡 現況写真

(3) 喜十谷石鍋製作遺跡

西海市西彼町八木原郷内にあり、県道 205 号線と七浦池との間の雑木林中に位置する。本製作所跡では 2 箇所 の 工房跡を確認しており、南側を喜十谷 001、北側を喜十谷 002 と仮称し、喜十谷の名称については旧字名を冠した。

喜十谷 001 は、隣接するみかん直売所横からのアクセスが容易である。確認した工房跡は七浦池に面する谷上の尾根上に位置する。その長軸（南北）岩壁両面（クレパス状）には、石鍋製作に伴う工具痕が認められる。喜十谷 002 は同 001 から 145° 北進し、同 001 と同様の立地状況にある。本工房跡では露頭壁面またはクレパスといった明確な工房跡は確認できないものの、地表部に極めて多くの廃石が散在する。これは東隣地ある宅地の建設に伴い工房跡は滅失した可能性が高いと思われ、記録上、「工房跡」として記録した。

本遺跡は前述した 2 遺跡とは異なり近傍に小河川はないものの、同山系に属する。柴山石鍋製作遺跡とは木場川と遺跡空白地域を挟んだ東側に位置し、この空白地域はゴルフ場にあたる。ゴルフ場内部は踏査が不可能であるが、近辺には滑石片が散在することは確認しており、仮説の域を出ないものの空白地域にも石鍋製作遺跡が存在していたとしたら、本遺跡は柴山石鍋製作遺跡の東端にあたる。

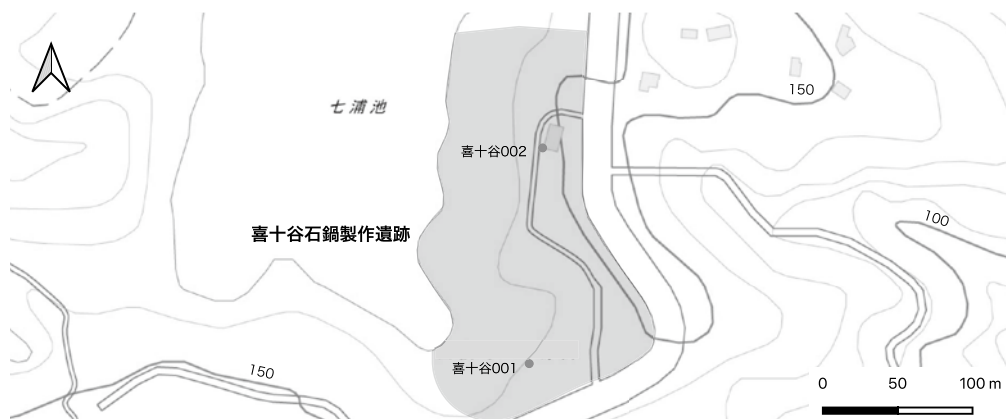


Fig.8 喜十谷石鍋製作遺跡 各工房跡位置 (S=1:5,000)

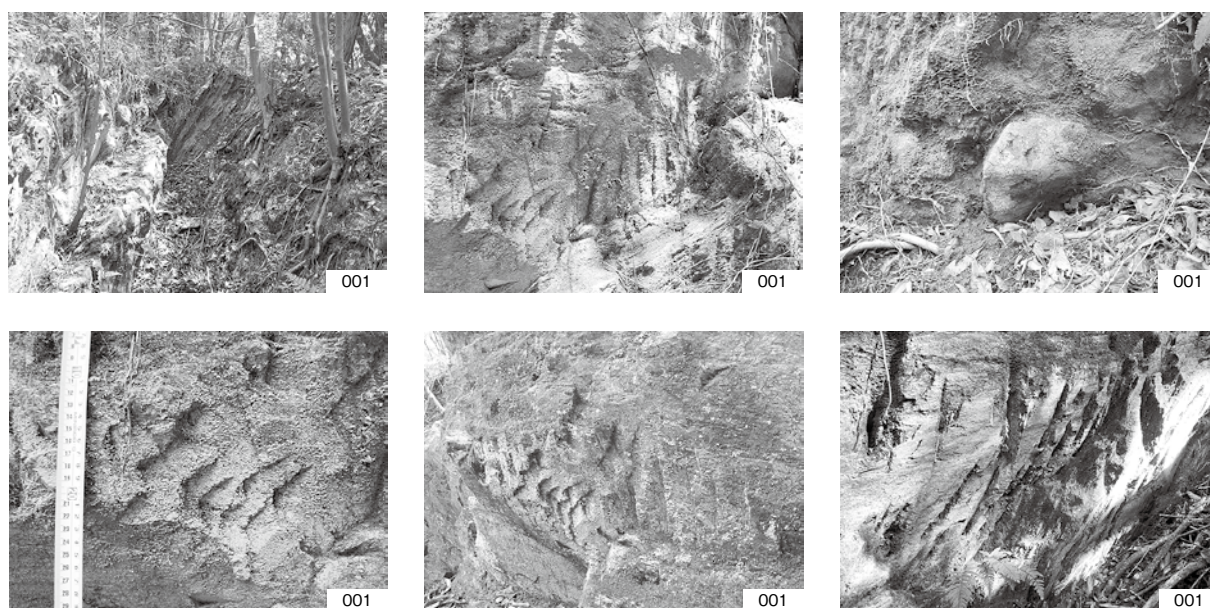


Fig.9 喜十谷石鍋製作遺跡 現況写真

Table.3 喜十谷石鍋製作遺跡 基礎データ

工房名	位置			工房壁面状況			工具痕幅	廃石状況	未製品
	緯度	経度	標高(m)	採掘面	主軸	規模(m)			
喜十谷001	33.028008	129.732278	147	クレバス	南北向	長15/高2	2~3寸	少	なし
喜十谷002	33.030302	129.732374	153	不明	—	—	—	多	なし

3. 当該地域の石鍋製作遺跡調査の課題と展望

(1) 石鍋製作遺跡のゾーニング

岩氏（稗木場）及び喜十谷石鍋製作遺跡は、現在までに工房跡が数地点しか確認できておらず、遺跡の価値付けをするための情報が極めて少ない状況である。しかも、各遺跡で滅失した工房が少なからず存在したことも、遺跡の全体を捉えることを困難としている。

一方、柴山石鍋製作遺跡で確認できた数多くの工房跡から、石鍋製作遺跡に立地環境から見る遺跡範囲の在り方について検討を行いたい。本稿で報告した柴山石鍋製作遺跡は、長崎県遺跡地図によると「柴山石鍋製作遺跡」と「柴山第2石鍋製作遺跡」に分かれて登録されており、前者は少なくとも分布調査が行われた1982年には認識されており、後者は2021年に新規登録された遺跡である。両遺跡は異なる時期と経緯で発見されたために2つの遺跡として登録されているが、石鍋製作遺跡を数多く調査している東貴之は、目一つ坊石鍋製作所跡における調査所見として、石鍋製作遺跡は「一山一遺跡（ひとつの山でひとつの遺跡）」として捉えることが望ましく、ホゲット、柴木屋、白野石鍋製作遺跡も同様であると論じている（東2011）。つまり、東は「山全体を遺跡として捉える必要性」（東2003）を提唱している。

さらに岩石学的知見として、森康は「西彼杵半島の滑石層は、概略するとドーナツ形状をしており、結果的に一定の幅を持つ範囲に工房跡が造られる」と解説している（註4）。尾根を跨いで表層化するという西彼杵半島滑石層の特徴は、石鍋製作集団や製作技法における明確な差別化ができない以上、岩石学的視点により尾根や谷等の地形的変化よりも広域にグルーピングすること（遺跡範囲の再検討）も必要と思われる。したがって、この両者の所見に基づくと、「柴山石鍋製作遺跡」と「柴山第2石鍋製作遺跡」は同一遺跡として捉えることができ、北側に位置する岩氏（稗木場）石鍋製作遺跡とは工房跡の連続性は確認できないことから岩石学上でも隔絶性があると認められ、長崎県教育委員会が登録したように、別遺跡として捉えることは妥当であろう。

(2) 石鍋製作遺跡の稼働期間等

石鍋製作遺跡の工房跡を踏査する上で、最も困難な課題は稼働期間を検証することである。稼働期間については、創業期、稼働期、廃絶期の3時期を設定することができ、現在、私たちが確認できるものは壁面から石鍋を剥ぎ取りつくした状態であり、廃絶期の状態である。当時の石鍋工人たちは滑石層が比較的厚みのある露頭岩体を発見し石鍋を製作する。そして、継続した石鍋製作ではその前段階の製作痕を削り落としながら、新たな石鍋を製作する。つまり、石鍋製作の古い様相は岩壁面にほとんど痕跡を残すことはなく、廃棄された石鍋の型式と石鍋を取り外した窪地の大きさを頼りに検討するほかにない。この両視点から類推すると、柴山石鍋製作遺跡では概ね北方向に古相の工房跡と未製品が確認でき、次第に南方向へ稼働範囲が遷移していったと考えることができ、「木場川沿いの低標高」から「丘陵上の高標高」へ移ったと想定できる。これは、石鍋製作跡後に工房から河口または集積地への運搬にも関わることであり、運搬安易地から先行して石鍋製作を開始した可能性がある。

ただし、このことについても「現在確認できる範囲」での検証であり、地表下の壁面の状況や坑道奥の状況の追認調査で変更となるであろうと思われる。

(3) 石鍋製作遺跡の規模

筆者が石鍋製作遺跡の調査を開始して20年が経過し、柴山石鍋製作遺跡はこれまで調査した製作遺跡の中でも、それらを遥かに超える規模を有している。この製作所跡の規模の大小については地質学・岩石学アプローチによる考証が必要であり、考古学と他分野学との総合研究により解決していくことを前提として、「本調査を行った際の実感」を言語化しておきたい。西彼杵半島の中央から南部の石鍋製作遺跡は一遺跡における工房跡の数も多いものの、一工房跡の規模は小さいものが主体をなしている。反対に、今回の柴山石鍋製作遺跡やツル掛石鍋製作遺跡のように西彼杵半島北部（特に大村湾内湾側）では一遺跡内の工房跡の数は少ないものの、一工房跡が大規模となる傾向が見受けられる。工房跡のリスト化方法や、地域的な踏査の有無により偏重があることだけかもしれないが、将来的に多角的に研究していく上での一つの課題と捉えていきたい。

4. おわりに

柴山・岩氏（稗木場）・喜十谷石鍋製作遺跡は、現在までに長崎県西彼杵半島で確認した最北端の石鍋製作遺跡で、滑石形成と密接に関係する蛇紋岩の分布状況から、今後、さらに北側で新たな遺跡が確認される可能性は低いと推測できる。これらの石鍋製作遺跡は、西彼杵半島最北端という立地的側面のみで価値づけされるべき遺跡だけでなく、これまでに調査・報告されることがなかった北端域の石鍋製作状況を示す遺跡であることに加え、特に柴山石鍋製作遺跡は西彼杵半島最大規模の製作遺跡として評価するべきであり、詳細調査により得られる情報量（稼働期間、製作技法の変遷と多様性等）は他遺跡よりも秘めた可能性は高い。今後も他遺跡の調査と並行して踏査を行い、情報の蓄積を微力ながら図っていきたい。

冒頭でも述べたとおり、千年近く残置し続けてきた遺跡群が近年の自然災害や生産活動による崩落・現状変化は喫緊の課題であり、将来的な滅失は避けることはできないであろう。このように滅失の可能性のある遺跡群については、本稿で実践する踏査報告の積み重ねが必要である。

最後に、本稿の起稿に際し用語の統一化の必要性を感じていたものの、先達の研究者の用語を踏襲しながらも、個人的な考えで用語を敢えて使用したものもあり、誤解を招いたことは否めない。石鍋製作所跡に残された痕跡について詳細な観察を今一度行い、学史等を考慮した上、別稿で整理を行いたい。

謝辞

現地踏査や各工房跡での観察等について、長崎石鍋記録会の東貴之氏をはじめ、柴田亮氏、松尾朱莉氏、松尾紬生氏にもご協力をいただいた。また、柴山石鍋製作遺跡のき損を発見した際、各種調整や新規遺跡への登録事務など西海市教育委員会の方々にご対応いただいた。末筆ではありますが記してお礼申し上げます。

【註】

- 1 各工房跡の座標は、iphone13pro を媒体として「スーパー地形」アプリを使用して、世界測地系（WGS84）測定値を記載している。
- 2 柴山石鍋製作遺跡は長崎県教育委員会の踏査記録の簡易図によれば、本報告の柴山017～019地点であることは明確であるが、周知されている地点とは北東約150m の尾根を隔てた地点であるため、各種事務手続きの上、修正をお願いしたい。
- 3 各工房跡で確認した滑石岩体については、表層確認では「自然隆起岩体」及び「転石」の2形態あるものの、下層で連続する可能性もあることを考慮し、本稿では明らかに「転石」でない限り「岩壁面」の用語で統一した。
- 4 森 康 氏（北九州市立自然史・歴史博物館）がホゲット石鍋製作遺跡史跡指定40周年記念シンポジウム（西海市教育委員会主催）の現地見学会において解説した概要。

【参考文献】

- 荒木伸也 1998 「下茅場遺跡」『西彼町文化財調査報告書』第1集 西彼町教育委員会
- 下川達彌 1980 「大瀬戸町石鍋製作所遺跡」『大瀬戸町文化財調査報告書』第1集 大瀬戸町教育委員会
- 長崎県教育委員会 1994 「長崎県遺跡地図-長崎市・諫早市・大村市・西彼杵郡・北高来郡地区-」『長崎県文化財調査報告書』第110集
- 石橋忠治 2007 「八ヶ岳における石鍋製作所跡」『西海考古』第7号 西海考古同人会
- 新里亮人 2002 「滑石製石鍋の基礎的研究-付 九州・沖縄における滑石製石鍋出土遺跡集成-」『先史琉球の生業と交易-奄美・沖縄の発掘調査から-」
- 月川繁雄 2001 『海夫道浦-石鍋が語る海の中世史-』昭和堂
- 東 貴之 2003 「滑石製石鍋製作所跡について-駄馬・目一つ坊石鍋製作所跡を中心に-」『西海考古』第5号 西海考古同人会
- 東 貴之 2011 「【遺跡紹介】怪我をした製作所跡」長崎石鍋記録会 HP (<http://higashi-cultural-assets.cloud-line.com>)
- 東 貴之 2012 「唐石尾石鍋製作所跡の踏査結果について-形上湾における石鍋製作所跡-」長崎石鍋記録会 HP (<http://higashi-cultural-assets.cloud-line.com>)
- 松尾秀昭 2009 「伊佐ノ浦川周辺の石鍋製作所跡-白野石鍋製作所跡群-」『調査報告』Ⅱ 長崎石鍋記録会